

技術先進国の日本でも、ものづくりの基礎である金型学科を大学に設置すべきという強い思いがあった。当時、岐阜大学で金型を担当され、現在は副学長を務めておられる王志刚教授と意見が一致し、学科創立に協力することになった。

文部科学省への根回しに加え、当時の学長の協力も得られた。私はメーカーに協力や寄付をお願いした。約3億円の工作機械や工具をそろえることができた。2006年のことである。全国初の専門学科の誕生



金型創成技術センターの設立

大垣精工会長 上田勝弘

生であり、学生の人気も高かった。現在は地域連携スマートフォン技術研究センターとして地域社会に貢献している。当社にも卒業生がおり、重要な戦力となっている。全国、海外から注目を集め、「金型は岐阜大学」との名声が定着しているのはうれしい限りだ。

世界では人工知能(AI)の発展と普及で「人間の仕事が奪われる」と言われている。しかし、製造業を中心とするものづくりの領域では、AIは人間の仕事を助けることはできて、主役にはなれないと考えている。

ロボットの普及で人が主役だった産業でも合理化や省人化が進み、産業構造が変化していくのは当然だ。しかし、AIは人の知恵から生まれたもの。どれほどAIや自動化技術が発達しても、ロケットの胴体組み立ては手作業で行われている。最新の半導体チップ、当社が加工しているハードディスクの超精密な最終出荷検査も、人の目による確認が不可欠で自動化だけでは出荷できない。ものづくりの工程の多くは自動化できても、最終判断は人に委ねられているのである。